

ぬつたり

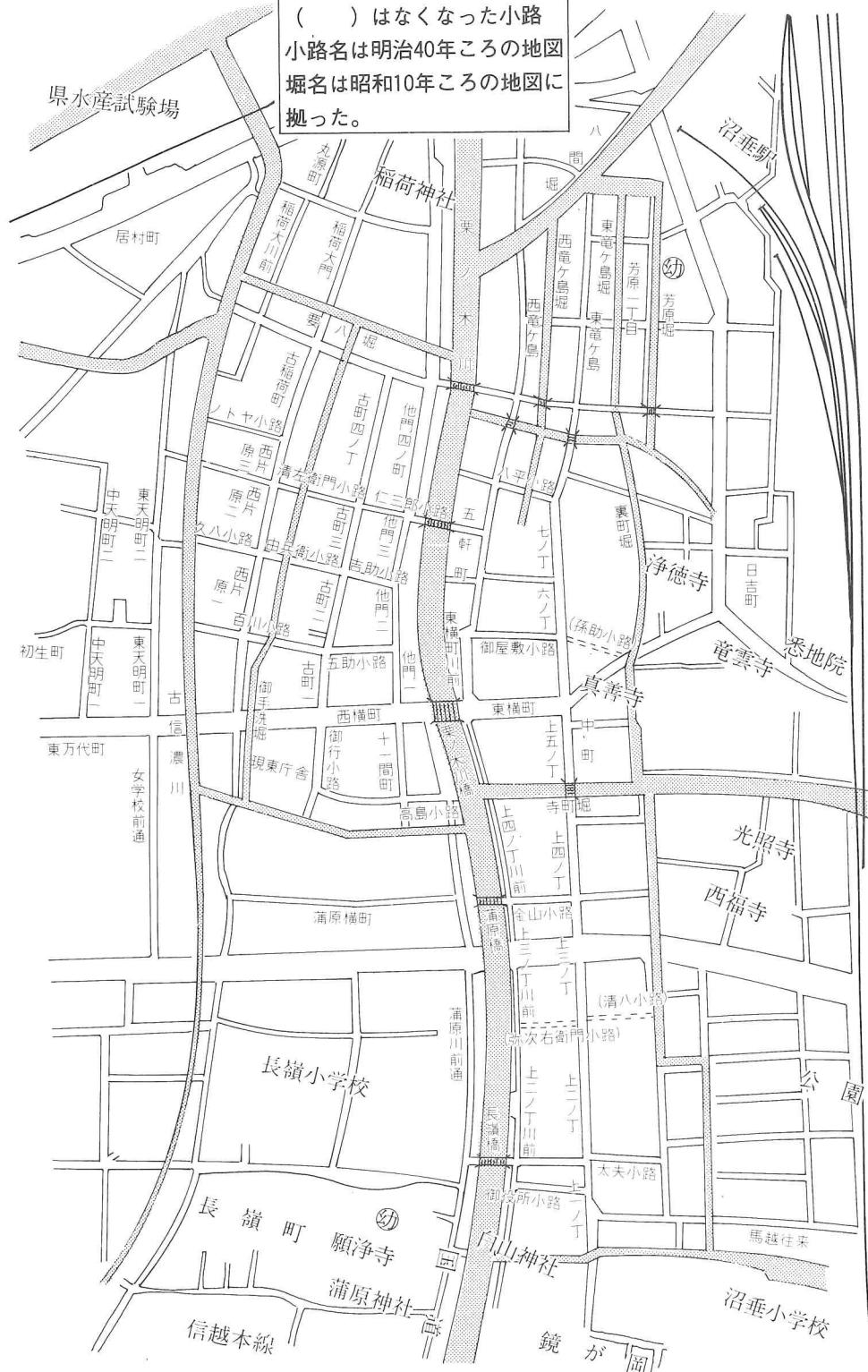
沼垂定住三百年祭実行委員会

沼垂定住三百年記念誌



沼垂の小路と堀

() はなくなつた小路
小路名は明治40年ころの地図
堀名は昭和10年ころの地図に
拠つた。



てられていった。

昭和十一年に新潟硫酸株（現・サン化学）がここに工

場を建設したのを皮切りに、現在まで北越製紙、三菱ガス化学、日本鋼管、旭カーボンなどの大工場が建設され、かつての潟は臨港工業地域に姿を変えている。



昭和45年ころ 補装工事中の栗ノ木川バイパス
—明石通り交差点付近（笹川勇吉氏提供）

(5) 栗ノ木川の埋め立て

沼垂町の中央を南北に貫いて、片側それぞれ三車線の自動車道が走っている。いわゆる栗ノ木川バイパスだが、正式には明石通り交差点以北は県道新潟港—沼垂線、以南は国道七号線である。

かつてこの道が、江戸時代以来沼垂町と近隣の村々を結ぶ舟運の幹線水路であり、横越島（亀田郷）の悪水排除の役割を担った重要な河川だったことは記憶に新しい。

戦後、新潟と沼垂の地盤沈下が進み、とりわけ昭和三十九年の新潟地震により事態は一層悪化した。県では震災復旧事業として「東新潟地区河川対策」を策定、四十年から事業に着手した。それまで新、旧栗ノ木川で排水していた鳥屋野潟への水を、潟の西部の親松地区に新しく排水路を作り直接信濃川へポンプで排水することにした。その結果、排水路としての栗ノ木川は要らなくなることになった。四十三年に埋め立てられ、舗装されて国道四九号線になつたのは四十六年のことである。その後新潟バイパスの開通により、紫竹山インターでこれと結ばれた。なお、紫竹山インター以南の亀田バイパス開

通により、国道四九号線もこちらに切り替えられた。

交通体系の変化により、すべての幹線道路から外された沼垂町で、栗ノ木川バイパスは、その重要度をますます高めて行くに相違ない。

なお、栗ノ木川埋め立ての基となつた「東新潟地区河川対策」の事業骨子は次のようなものであつた。

(1) 東新潟地区全河川の水位を下げる低水位方式を採用する。

(2) 親松に排水機を設け、鳥屋野潟へ集まる水を信濃川へ排水する。

(3) 馬越以北の栗ノ木川を埋め立てて道路とし、新栗ノ木川の川幅を三〇メートルに狭ばめるとともに水位を下げる。

(4) 通船川は中央付近に水門を設けて川を二分し、東側に農業排水を集め津島屋から排水、西側に都市排水

明治初期に作られた「皇国地誌」によると、沼垂・長嶺では農業と工業、蒲原では商業と雑業が大きな割合を占めている。全体としては、農工の比率が大きく、工業はみそ・しょう油などの生活必需品の生産が主体であったと思われる。

明治中期になると、舟運の便がよく新潟港に近いうえ、工場敷地となる原野が多いことなどから各種の工業が発展してくる。このような工業の発展につれ、人口も急激

を集め山ノ下から排水する。山ノ下に二重水門を設けて水位を調節し船やいかだの通行の便を図る。

(三) 産業と経済の進展

(1) 沼垂町産業の概況

表5 年次別・大字別・戸数・人口推移表

年次	戸数		人口		年次
	戸数	人口	戸数	人口	
明治 四十三年 大正 二年	二二六一、一、 一一〇九八五四 二三二七八四六〇	人 口	一〇九九八七、 〇八二五〇七八四 一〇六三九六七四	戸 数	蒲原
四十四年 大正 三年	(二二八) 三二一、一、 三二五五六六六	人 口	(六〇〇) 一、一、 五二〇六九五五三	戸 数	長嶺
四十五年 大正 四年	(七〇) 一一〇六六二 一〇三四五二	人 口	(三四〇) 五六七三二九五 五三七五	戸 数	流作場
四十六年 大正 五年	(六二) 一一九七六七 一二九二二七	人 口	(三〇五) 七四二〇三六九 七四四四	戸 数	山ノ下
四十七年 大正 六年	(四八) 八八六二五七 八八〇	人 口	(三一〇) 四一四五七七 四一六六〇	戸 数	合計
四十八年 大正 七年	(一) 三二、三二、一、 八六三三五九二 五四三一六〇	人 口	(一) 三八七〇七二 三四五八五八五	戸 数	

沼垂定住^三
百年記念誌

ぬつたり

昭和五十九年十月二十五日印刷
昭和五十九年十月二十七日発行

編著者 代表 伊藤 鼎

発行者 沼垂定住三百年祭実行委員会

印刷所 株式会社 文久堂

〒951

新潟市西区通六ノ町二二八〇番地
電話（〇二五二）代表二八一三〇八五